

2015年6月15日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 12

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

阮氏政権の黄沙隊の設立の経緯については、いまのところ徴すべき資料がない。オランダ東インド会社文書を用いた永積洋子氏の研究のなかにあるいは黄沙隊の設立と関わるかもしれない出来事の記述を見出したので紹介しておく（「17世紀の貿易家キコ 別名喜右衛門について」『日蘭学会会誌』13-1、1988年、pp3-4.）。

朱印船時代に活躍した林喜右衛門という貿易家に関する記述である。林喜右衛門は別名キコといい、その家は長崎在住の華僑で、永積氏によれば唐通事の家柄に属するかもしれないとのことである。鎖国に向かう1630年代に台湾貿易に着手し、ついでコーチシナに移住して交易活動を続け、1661年にはホイアン日本町の頭領になった人物である。

この人物が1634年8月にコーチシナに滞在していたときに、オランダ船フローテン・ブルック号がコーチシナのはるか沖の「プラセル島」で座礁した。その報を受けた喜右衛門は「国王」（阮福源）の許可を得て、自分の船で現場に向かい、フローテン・ブルック号のボートで付近の小島にたどり着いた乗員56人を救出し、貨物4箱を載せて広南に帰還している。貨物は「国王」に押収されている。

また、永積氏の研究の別の箇所でも、1633年にオランダ船がコーチシナに向かったときに、コーチシナの法律では嵐で船が陸に乗り上げると船も積荷も「国王」に没収されてしまうので岸にあまり近づけないように細心の注意を払ったと記されている（永積洋子『朱印船』吉川弘文館、2001年、p141）。上記の貨物の押収もこれに準じたものではないかと思われる。

さて、「プラセル島」で座礁したオランダ船の喜右衛門による救出と「国王」によるその貨物の押収という出来事が、パラセルの沈船の貨物の獲得を主たる目的とする黄沙隊の設立という発想に影響を与えた可能性は十分考えられるのではないか。コーチシナの阮氏政権は17世紀に入ってハノイからの自立を決断し、20年代後半からは北部の鄭氏政権との断続的な戦争状態に入っていた。30年代には拠点をクアンチ方面からフエ方面に移しており、新たな国家の方向の模索がなされていたのではなかろうか。そのような状況下で喜右衛門の行動が、政策立案者の思考になんらかの刺激を与えたかもしれないと考えることもあながち不可能ではあるまい。